

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：32605

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K11846

研究課題名（和文）コンテンツツーリズムにおける歴史像の構築と歴史系博物館の役割に関する実証的研究

研究課題名（英文）An empirical study on constructing images of history in contents tourism and the role of history museums

研究代表者

金子 淳（KANEKO, Atsushi）

桜美林大学・リベラルアーツ学群・教授

研究者番号：00452178

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、主に歴史系博物館を対象に、コンテンツツーリズムが来場者の歴史像の構築に寄与できているかどうかを検証した。現地調査および文献調査により、博物館が既存のコンテンツ（作品）を対象とした展示を行う際に、多様なオーセンティシティ概念を採用し、状況に応じて使い分けられていることが判明した。また、博物館とコンテンツツーリズムはシンプルに結びつくような性質のものではなく、さまざまな文化的な背景や政治・経済的な状況などと絡みながら、多様で複雑な展開を遂げており、そのオーセンティシティの相貌について具体的に描き出していく必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

コンテンツツーリズムと博物館との結びつきについては、経済効果や費用対効果などといった観点から積極的に活用しようとする動きがある一方で、安易に導入しようとすることへの懸念も根深く、両極端な反応をみせている。そこで本研究においては、こうした立場からは距離を置いた上で、コンテンツツーリズムと博物館の関係に関する歴史的・実践的検討を通して、相互の関係の具体的な相貌を描き出した。本研究において得られた知見は、実際のコンテンツツーリズムの現場、特に歴史系博物館において今後の展示の方向性を見極める重要な指針を与え、歴史まちづくりの実践の場にも寄与できると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study examined whether content tourism contributes to the construction of visitors' historical images, mainly in historical museums. The field survey and literature review revealed that museums adopt a variety of authenticity concepts when exhibiting existing content (artworks) and use them in different ways depending on the situation. The study also suggested that museums and content tourism are not simply linked, but have developed in a diverse and complex manner, intertwined with various cultural contexts and political and economic situations, and that it is necessary to develop a concrete picture of the aspects of authenticity.

研究分野：博物館学

キーワード：博物館 コンテンツツーリズム 展示 観光 歴史像 ポピュラーカルチャー オーセンティシティ

1. 研究開始当初の背景

現在、歴史を用いた街づくりが脚光を浴びている。とりわけ大河ドラマの舞台となった地域では街をあげてイベントを行い、NHKに対する大河ドラマ誘致合戦も激化している。ほかに、歴史小説やアニメの舞台となった地域では、同じような光景が繰り広げられているが、歴史に限らず、既存の作品(コンテンツ)の舞台を訪れる観光形態を「コンテンツツーリズム」といい、2010年代以降に広がりを見せるようになってきている。

コンテンツツーリズムは、博物館の展示や活動全般にも大きな影響を及ぼしている。歴史系博物館では、大河ドラマとタイアップして大々的な展覧会を開催したり、既存の小説やドラマ、アニメ、ゲームなどと連動して、そのキャラクターや世界観を前面に出した展示を作ったりするケースが増えている。

歴史系博物館における展示が、いわゆるコンテンツツーリズム全般と決定的に異なるのは、そのコンテンツやストーリーにおいて、「学術性」や「史実との整合性」が問われていることである。博物館は、学術研究の成果を広く社会と共有する機関であり、そのための専門職員として学芸員が存在している。歴史系博物館では、歴史学の専門家である学芸員が、歴史学の成果に基づいて具体的な史実を積み重ねることによって一つの歴史像を構築していく。

ところが、コンテンツツーリズムにおいて扱われるのは、一部史実に基づいているとはいえ、基本的には創作されたものであり、「架空の過去」である。しかもコンテンツツーリズムにおいて観光客は、こうした創作されたストーリーの中に身を委ねたいという「ストーリーへの没入欲求」を持って現地にやって来る。つまり、史実に基づいた学術研究の裏付けのある展示に基づいて歴史像を構築するのではなく、既存のドラマや小説において提示された架空の歴史像に、現実の文化遺産や展示を当てはめながらその歴史像を確認・補強していくのである。

しかし、既往のコンテンツツーリズム研究においては、こうした歴史像自体の検討は後景に退き、むしろその先の経済波及効果や地域活性化方策の検証へと直結させる傾向が強かった。だが、学術研究機関である歴史系博物館がこの問題を避けて通ることはできない。むしろ積極的な議論の対象となるべき重要な課題である。

本研究は、こうした現状を踏まえて着想したものである。

2. 研究の目的

コンテンツツーリズムと結びついた博物館展示は近年ますます増加し、定番化の一途を辿っている。特に、歴史上の人物や出来事に焦点を当てたドラマや小説、アニメ、ゲームなどの作品を扱った展示も増えている。このような現状を踏まえると、コンテンツツーリズムの題材となる歴史関連の作品において展開される「架空の過去」を、歴史系博物館の展示において現実の歴史像に当てはめようとする時に、どのような齟齬が生じ、コンテンツツーリズムの「質」にどのような影響を与えるのかという観点が重要となってくる。

そこで本研究においては、主に歴史系博物館の展示を対象に、コンテンツツーリズムが来場者の歴史像の構築にどのように寄与しているかを検証することを目的とする。また、本研究において得られた知見は、実際のコンテンツツーリズムの現場、特に歴史系博物館において今後の展示の方向性を見極める重要な指針を与え、歴史まちづくりの実践の場にも寄与することができると考えられる。

3. 研究の方法

上記のことを明らかにしていくため、文献調査と現地調査を並行して実施した。現地調査にお

いては、以下のような事例を対象として調査した。すなわち、大河ドラマで取り上げられたことをきっかけに建設された展示施設(大河ドラマ館など)や大河ドラマとタイアップして大々的に行う展覧会、ドラマや小説などで有名な歴史事象を扱った常設展示を有する博物館、話題となったドラマや小説の舞台などを扱った期間限定の特別展・企画展などである。

他方で、文献調査に基づく理論的考察もあわせて行った。特に注目したのは、「物語性」である。コンテンツツウリズムにおいては、参照されるべき「物語」の存在が不可欠であり、その「物語」がどのように「生産」され、現地において「演出」され、そして「消費」されているのかを確認する作業が必要だからである。

また、コンテンツツウリズムにおけるコンテンツ(作品)は創作である場合が多いため、学術研究機関である博物館との関係でいえば、オーセンティシティの毀損が起こりうる。そこで、「オーセンティシティ」という概念についても注目し、博物館においてオーセンティシティをどのように担保しようとしているのかについても調査を進めた。

4. 研究成果

(1) 物語性

まず、コンテンツツウリズムの中心となる「物語性」に注目して、特にNHKが放映する大型時代劇ドラマシリーズである「大河ドラマ」を事例として取り上げて考察した。あくまでもドラマというフォーマットで制作されるものの、時代考証をはじめとする専門家が関わって作品が制作されるため、その地域への関わりにおいてリアリティが生じやすいという性質をもつ。また、その人気や知名度において社会へ影響力は圧倒的に大きく、舞台となる地域への経済波及効果も絶大である。

そこで、大河ドラマというメディアによって提示された歴史というコンテンツが、どのように観光資源化され、展示メディアにおいてどのように表象されるのかというプロセスを探った。特に、舞台となった地域に設置される仮設展示施設である「大河ドラマ館」に注目し、具体的な展示内容を検証することにより、地域の歴史イメージの創出にどのような影響をもたらしたかを検討した。

その結果、サブカルチャーと結びついた歴史像の表象が社会的に求められる一方で、基礎的な調査研究に基づく学術性が担保された展示を志向する博物館側の葛藤が明らかとなり、そのジレンマに対してどのように対応していくかが本研究における大きな課題であることが改めて確認された。

また、大河ドラマは歴史の一つの解釈にすぎないにもかかわらず、大河ドラマという強力なメディアによって増幅・権威付けされていくことにより、歴史に対する多様な読みや解釈の可能性が閉じられていく危険性があることも認められた。

これらの調査の成果は、「博物館を取り巻く『物語性』をめぐって 「観光立国」政策と日本遺産を中心に」(『桜美林論考 人文研究』第11号、2020年)および「大河ドラマの観光資源化と歴史イメージの創出 コンテンツツウリズムのなかの大河ドラマ館」(『桜美林大学研究紀要 社会科学研究』第2号、2022年)という2本の論文として発表した。

(2) 意図と解釈

一方、調査を進めていく中で派生的に生じてきた課題が、観覧者側の「解釈」の問題であった。すなわち、「物語」を提示する側ではなく、受け取る側の方に軸足を置き、観覧者の「解釈」に注目して調査を進める必要性が生じてきたのである。

ここで事例として取り上げたのは、2019年に愛知県で開催された「あいちトリエンナーレ2019」内の企画展「表現の不自由展・その後」における展示妨害活動である。これは、「天皇制」や「戦

争」といった論争的な主題について、展示する側の意図と観覧する側の政治的な信念や解釈の相違によって、過剰なまでの妨害行動が巻き起こり、展示中止にまで至った事件であるが、展示する側の意図と、観覧する側の解釈のズレについて検討した。また、美学や分析哲学などの議論を参照しつつ、展示の意図と解釈の問題について考察を進めた。

その結果、展示の解釈にあたっては、作者や展示する側の意図をまったく排除することはできないため、必ずしも観覧者側の解釈の自由を無条件に最大化させるべきではないという知見を得た。調査の成果は、「博物館展示における意図と解釈」(『桜美林大学研究紀要 社会科学研究』第1号、2021年)としてまとめた。

(3) ポピュラーカルチャーとオーセンティシティ

さらに、コンテンツツーリズムに関連して、「ポピュラーカルチャー」という観点から分析を行った。ポピュラーカルチャーの範囲は広く、またそのジャンルも一定していないが、おおむねアニメ、マンガ、ゲーム、映画、テレビなどが該当する。しかし、博物館との関連性については多様であるがゆえにその実態を掴みにくく、その是非や評価についても定まっているとはいえない。

ポピュラーカルチャーと博物館の結びつきについては、とりわけ行政評価の対象となる公立博物館において、組織の維持・存続に向けてその存在意義を対社会的に示していくために、積極的に経済効果や顧客満足度、費用対効果といった指標をクリアしていく必要性に迫られる中で、博物館側がポピュラーカルチャーに接近しているという側面もある。つまり、公費をつぎ込むだけの存在価値をアピールするための「切り札」として、ポピュラーカルチャーがむしろ積極的に活用されているのである。

そこで、ポピュラーカルチャーと博物館の関連性に注目し、コンテンツツーリズムの動向を踏まえながら検討した。その検討の過程で重視したのは、「オーセンティシティ」という概念である。一般に博物館は、学術的な方法論によって現時点でもっとも確実と思われる学術的成果を公表する場であるため、客観的で学術的なオーセンティシティを求めるとされる。ところが、博物館におけるポピュラーカルチャーの展示を調査する中で確認されたのは、そのオーセンティシティが、必ずしも客観的な史実を重視するというだけではなく、関係する主体に応じてその概念に揺らぎが生じているということであった。すなわち、必ずしも本物が偽物が、あるいは史実か創作かといった単純な二元論に還元することはできず、発信者が何を意図し、受容者が何を求めるかによって、多様なオーセンティシティ概念が想定されうるということである。

このような観点から、博物館におけるポピュラーカルチャーの展示について検討したところ、博物館がポピュラーカルチャーとの関わりにおいて多様なオーセンティシティ概念を採用し、状況に応じて使い分けられていることが判明した。また、博物館とポピュラーカルチャーはシンプルに結びつくような性質のものではなく、さまざまな文化的な背景や政治・経済的な状況などと絡みながら、多様で複雑な展開を遂げているだけに、さらに事例を積み重ねていくことでそのオーセンティシティの相貌について具体的に描き出していく必要性が示唆された。

調査の成果は、「博物館における場所性とオーセンティシティ」(『桜美林論考 人文研究』第10号、2019年)および「博物館とポピュラーカルチャーの関連性に関する予備的考察 コンテンツツーリズムとの関係から」(『桜美林大学研究紀要 社会科学研究』第3号、2023年)という2本の論文としてまとめた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 金子 淳	4. 巻 2
2. 論文標題 大河ドラマの観光資源化と歴史イメージの創出 コンテンツツーリズムのなかの大河ドラマ館	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 桜美林大学研究紀要 社会科学研究	6. 最初と最後の頁 25-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金子 淳	4. 巻 1
2. 論文標題 博物館展示における意図と解釈	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 桜美林大学研究紀要 社会科学研究	6. 最初と最後の頁 16-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金子 淳	4. 巻 762
2. 論文標題 博物館と文化財をめぐる政策的動向 「観光立国」政策との関わりを中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 月刊社会教育	6. 最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金子 淳	4. 巻 11
2. 論文標題 博物館を取り巻く「物語性」をめぐって 「観光立国」政策と日本遺産を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 桜美林論考 人文研究	6. 最初と最後の頁 80-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金子 淳	4. 巻 10
2. 論文標題 博物館における場所性とオーセンティシティ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 桜美林論考 人文研究	6. 最初と最後の頁 67-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 金子 淳	4. 巻 12
2. 論文標題 地域・市民と向き合う博物館活動の課題 利用者のニーズと博物館の主体性をどう考えるか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史学と博物館	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金子 淳	4. 巻 180
2. 論文標題 博物館法改正と「非営利の原則」の危機	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ベン	6. 最初と最後の頁 10-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金子 淳	4. 巻 3
2. 論文標題 博物館とポピュラーカルチャーの関連性に関する予備的考察 コンテンツツーリズムとの関係から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 桜美林大学研究紀要 社会科学研究	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 金子 淳	4. 巻 158・159
2. 論文標題 戦争展示における「物語化」と「解釈の自由」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 歴史の理論と教育	6. 最初と最後の頁 5-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 金子 淳
2. 発表標題 戦争展示における「物語化」と「解釈の自由」
3. 学会等名 名古屋歴史科学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金子 淳
2. 発表標題 博物館法改正をめぐる政策動向と関連法制の現状 観光・文化財政策を中心に
3. 学会等名 日本社会教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金子 淳
2. 発表標題 博物館と文化財をめぐる政策的動向
3. 学会等名 日本社会教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金子 淳
2. 発表標題 博物館を取り巻く政策的動向と今後の展望について
3. 学会等名 君津地方公立博物館協議会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------